

第六章 ナース暴走

闇司祭 「さあて、被検体ちゃん、私と楽しい楽しい実験をしましようねえ♪」

「マリナ、嫌よ。いまのあなたに身体をいじらせたら、どうなるかわかつたものじやないわ」

聞言祭 性格ないでいいのよ？ あなたもこーや側に来られるよ？ にしてあげる。 て言へてるだけなんだから」

い。止められればの話だけど)

ナース 何事ですか?  
診察室には、マリナ様が……

闇古祭 あら、自ら餌場に飛びこんでくる人がいるだなんて」

ナース 「すぐに先生を呼びます」

闇司祭 「そうはさせないわよ」

【闇司祭、ナースをベッドへ押し倒す】

ナース 「うへつ……」

闇司祭 「はへい、マウントポジショーン♪」

ナース 「やられました。私としたことが」

闇司祭 「んふふつ♪ 被検体ちゃんより先に、ナースちゃんを手籠めにしてあげる♪」

マリナ (ターゲットがあつちに移ってる。いまなら、逃げ出すチャンスかも)

闇司祭 「被検体ちゃん？ いまのうちに逃げ出そうとか考えちゃダメよ？ 第一、ここにはもうひとりいることだし」

マリナ 「おとなしくしていろと言ふのね」

闇司祭 「手伝ってくれてもいいのよ？ もし手伝ってくれるなら、その間の無事は保障するわ」

マリナ (おとなしく従つたほうがよさそうね)

マリナ 「わかつたわ。そのナースを、さつきみたいな快楽責めにすればいいのよね？」

闇司祭 「そういうこと♪」

ナース 「司祭様とて、先生にこの悪事が知れたらタダじや済みませんよ？」

闇司祭 「パトロンに楯突くなら、それまでね。私は暴徒になつてているのだし、怖いことはないわ」

ナース 「……いいでしよう。しかし、私もこの病院に勤務するナースです。簡単には参りませんよ」

闇司祭 「それは、やつてみてからのお楽しみね♪」

マリナ 「お薬も使うのよね？」

闇司祭 「もちろんよ♪ 手際のいい子は大好き♪ こつちに来なさい。キスしてあげるから」

マリナ 「遠慮するわ」

闇司祭 「ダメよ。あなたの手際のよさに、キスで応えたいの。だから来なさい」

マリナ 「くつ……」

闇司祭 「はい、ちゅ～……ちゅつ、んちゅつ……ちゅむつ、ちゅう……」

マリナ 「ちゅつ……むちゅつ、ちゅむつ、ちゅふつ……」

闇司祭 「ちゅつ、れるちゅつ……ぶああつ……んふふつ、このあともサポートお願ひね♪」

ナース 「ずいぶんと、節操なしになりましたね」

闇司祭 「あら？ キスは報酬になり得ないかしら？ ナースちゃんなら、先生からのキスは『褒美よね？』

ナース 「べつに色っぽい関係ではありませんが……」

闇司祭 「あらあら、照れちゃつて。尊敬する先生だもの、当然と言えば当然よね。でも、いまから私の快樂責めでえっちなことしか考えられなくしてあげるわ。まずは、このチンポを勃起させるところから。どんなふうにいじられるのが好きかしら？ カリ首？ 裏筋？ それとも、先っぽ？ ど、でも、好きなところを愛撫してあげるわよ？」

ナース 「特に、ありません……」

闇司祭 「じやあ、スタンダードに竿から……握って、ゆっくり上下に……シコシコ、シコシコ……」

ナース 「んつ……んふつ……んくつ……んう……」

闇司祭 「我慢してもムダつて、あなたならわかつてているはずだと思うけど」

ナース 「わかつていても、屈することはできません。先生に顔向けが……んつ……できなくなります……んうう……」

闇司祭 「私にも、そんなことを言つてくれる人が欲しいわね。被検体ちゃんが、そうなつてくれるとい嬉しいんだけど……」

マリナ 「これまでの自分の言動を知つてのことかしら」

闇司祭 「当然そななるわよね。だから、あなたの先生への気持ちを踏み躡ることにするわ。普通にいじるだけで勃起しないなら、裏筋を、タマタマのほうから、指先だけで……つづう……」

ナース 「あつ、んつ……」

闇司祭 「反応が良化したわ。これを繰り返したら勃起しそうね」

ナース 「あふつ……んくつ……」

闇司祭 「我慢しない、我慢しない。すればするほど、つらい時間が長くなるだけよ？」

勃

起して私にいじられちゃえば、楽になれるのに」

ナース 「んんう……んふう……くう……うくう……つ」

闇司祭 「案外、辛抱強いのね。じゃあ、息を吹きかけながら……ふうへ、ふうへ~」

ナース 「んふあつ、はあつ……つ」

闇司祭 「声が少し色っぽくなつたわ。チンポも芯が硬くなつてきてる。もうひとつ息ね……ふううへ、ふううへ~」

ナース 「んくつ、あつ……んあつ……つ」

闇司祭 「んふふつ♪ もう半勃ちよ? ここから先は早いって、あなたもわかるわよね?」

ナース 「くつ……でも、抵抗を……」

闇司祭 「握りやすくなつたから、また握つて……シコシコ、シコシコ、シコシコ……」

ナース 「ふつ、はつ、はつふ……あつ……!」

闇司祭 「ほおら、ムクムクしてきちゃつた♪ あとはベースを上げて力を入れて……シコ

シテシテシテ

闇司祭「はい、勃起チンポのかんせ～い♪ チンポって残酷よね。どれだけ嫌がつても、刺激があつたら勃起しちやうんだもの」

マリナ「あの、私はなにを……」

闇司祭「この子へのお返しをすればいいんじやないかしら？」  
チンポ以外で

マリナ「じゃあ、乳首を……」

闇司祭「毒液、好きに使っていいわよ♪ 私も手コキに使うから。単純なシコシコだけで  
もつまらないでしようし」

ナース「やられる側というのは、こういう気持ちなんですね。よくわかりました」

マリナ「それは、私に言つてるの？」 いまさら遅いんだけど

闇司祭 「そうね。まあ、いつそのこと楽しみなさい。快樂責めである以上、気持ちいいのは確かなんだから。じゃあ、毒液を両手に塗つて、全体に伸ばして……見えるかしら？」

両手の指を絡めて、手のひらの土手を合わせると、間に隙間ができるの。ここに、あなたのチンポを入れて……」

ナース「はうつ……あつ……！」

闇司祭「おでてマンコに、チンポ挿入完了♪ この状態でチンポを締め付けたまま、上下に動かして……クチュクチュ、クチュクチュ……」

ナース「あくつ、んくつ、んんつ……ずいぶん乱暴なしじき方ですね……んつ、んくう……」

闇司祭「毒液がヌメヌメしてて、痛みはないでしよう？ だったら、これぐらい乱暴なほうが気持ちいいに決まっているわ。クチュクチュ、クチュクチュ……カリのでつぱりをいじめるみたいに……クチュクチュ、クチュクチュ」

ナース「ひくつ、あくつ……ひつくう……んくつ……」

マリナ「こつちも始めるわよ。あなたには、おちんちんだけじゃなくて乳首もいじられたから。唾液を垂らして……」

ナース「んひつ……！」

マリナ「冷たかった？ それとも、もう感じてる？」

ナース 「そのようなことでは……あつ、んつ……おちんぽが……つ！」

闇司祭 「乳首に気を取られていたら、簡単にチンポがイっちゃうわよ？ ちゃんと、両方ケアしないとね！」

マリナ 「いい機会だし、私がどれだけつらかったか味わいなさい……んちゅつ、ちゅつ、れろれろつ、れろつ、んれろつ……乳首も勃起させて、おちんちんまで我慢できないようにしてやるんだから……れろう、れろろう、んふう、ふう……れるつ、んれるるつ……」

ナース 「くふう……はあ……想像していたよりも、確かにつらいですね……しかし、我慢できないほどでは……」

闇司祭 「そう、余裕なのね。だつたら、手の締め付けを強くして……クチュクチュクチュクチュ！」

ナース 「はふつ、あつ、ん、あ、いあつ……んつ、あああああつ……んつくう……ああつ……亀頭が、こすれて……んあああつ……！」

闇司祭 「んふふつ♪ さっきまでの余裕はどこへ行つたのかしら？ つらそうに喘いじやつてるわよ？」

ナース 「くつ……まだ、これなら……」

マリナ 「んちゅっ、ちゅっ、れろれろれろっ……！ あなただって、乳首は性感帯で  
しよう？ れろっ、んれろっ、れろれろれろっ……」こんなに勃起させたら、おちんちんに  
も響いているはずよ」

ナース 「開発など、されでは……ひあああっ……！」

マリナ 「やつぱり感じてるじゃない……ぢるるるっ、れろっ、れろろろっ、はふっ、ん  
ぶつ……あむあむつ……歯を使って、甘噛みして……ああむつ」

ナース 「んくつっつっ！」

闇司祭 「いまのはかなり感じたみたいね♪ チンポが天を衝くように跳ねたわよ？」

ナース 「はあ、はあ……」のままで、快感に流される……でも、歯を食い縛れば……」

闇司祭 「亀頭が敏感なのがわかつてんんだから、そんなことをしてもムダよ？ 手の動き  
を小刻みにして、亀さんだけを……グチュグチュグチュグチュつ！」

ナース 「ああああんっ！」

闇司祭 「んふふつ♪ いい喘ぎ声ね。それをずっと聞きたいわ♪ グチュグチュグチュグ  
チュつ！」

ナース 「あんっ、あっ、あん、あんっ、ふあっ、ひうっ、んくっ、ああああっ……！」

闇司祭 「もっとよ、もっと！ グチュグチュグチュグチュっ！」

ナース 「んいっつ、はあんっ、んあんっ、ひあっ、はうっ、んくっ、あああっ、ひああんっ！」

闇司祭 「いいわいいわ♪ たんまり感じて、チンポが我慢汁を出して、射精を準備を始めてる♪」

ナース 「うあっ、ああんっ、んおっ……おおっ……あぐっ、ふんぐっ……！」

闇司祭 「イモムシみたいに身をよじって、すぐ気持ちよさそうね♪ いまなら、毒液もすんなり受け入れるんじやないかしら？」

ナース 「薔薇の毒だけは……ひううっ、あああうっ……それは、やめてください……んっ、ああっ、司祭、さまあ……」

闇司祭 「許しを乞う姿はかわいいけれど、毒液の注入は決定事項よ。止められないわ」

ナース 「そんな……いま、なら……んっ、あう……先生にも、このことは黙つて……んんんっ！」

闇司祭 「必要ないわ。先生のほうも、同じ目に遭わせればいいだけだもの……んふふつ♪」

マリナ 「注入器、使うなら使いなさいよ」

闇司祭 「ちょっと素直じゃないのがマイナスポイントだけれど、使わせてもらうわ。勃起して、大きくなってる尿道口に、先端を差し込んで……」

ナース 「あふっ……奥まで、注入器が……あああっ……！」

闇司祭 「このまま動かしてあげるのもいいかもね……グリグリグリつ♪」

ナース 「んおおおっ……！　おおおおんっ……！　んおっ、おおおっ！」

闇司祭 「あらあら。尿道内部への刺激でも、こんなに感じちゃうのね♪　これをもつと感じられるように、毒液を注入してあげるわ♪　びゅくくくくくくく♪」

ナース 「ひぐうううっ……！」

闇司祭 「まだまだ注ぐわよ♪」

ナース 「あふうっ、んあああっ、ひぐっ、んぐっ……んおおっ、おおおおっ……！」

マリナ 「溢れるまで注ぐのよね」

闇司祭 「もちろんよ。それぐらい注がないと、意味がないもの」

ナース 「ひいひいひい……おちんぽが、中が熱い……つ！ ああああつ、んんぐつ……おちんぽ、ダメになっちゃう……射精どころじゃなく……尿道が溶けてなくなつちやうう……つ！」

闇司祭 「そんなことはないわよ。媚薬効果が出てるだけで。第一、ここにひとりいるじゃないの。たっぷり注がれまくったのに、五体もチンポも満足な状態の人が」

マリナ 「私に注いだ分だけ、お薬のつらさを味わったわいいわ」

ナース 「ひぐつ……んぐぐつ……ひとでなし……はあ、はあ……つ！」

闇司祭 「嫌ね、そんな暴言吐いて。せつかく、チンポの血管が脈打つて太くなつてるのに♪

マリナ 「お薬、溢れてきたわね」

闇司祭 「そろそろ満杯みたいね。引き抜いてあげないと」

ナース「んあつっつー！」

闇司祭「感じてる感じてる♪ 毒液のおかげで感度が上昇してるでしょーし、しげき方を  
変えましょーか♪」

ナース「ふう、ふう、ふう……」

闇司祭「そんなに睨んだって、もう毒液は身体の中よ？ ここまで来たら楽しんだほうが  
勝ちだと思うのだけれど……んふふ、チンポをしごいてる私が、快樂に染め上げてあげ  
ればいいだけね。こんな感じで、両手でチンポを握って、雑巾を絞るみたいに……ギュ  
チュギュチュ、ニュルニュルっ！」

ナース「んおおおつ！ ほおおつ！ んおつ、おおおつ！ おおおんんつ！」

闇司祭「あら、やつぱりこれは特別な刺激になるのね。止まらずに続けてあげるわ。ギュ  
チュギュチュ、ニュルニュル、ギュチュギュチュ、ニュルニュルっ♪」

ナース「はぐつ、ああつ、んおおつ、おおおんつ！ んおつ、おおおつ、あああああつ：  
んおつ！ んおおつ！」

闇司祭「気持ちいいからって、腰を突き上げたらダメじゃない」

ナース「ひぎつ、んぐつ、おおおつ！ んおつ！ ほおつ……！ ほお、ほお、ほお……：

んおおおおつ！」

マリナ 「零れたお薬もらうわよ。こっちにも塗りたくつてあげないと」

ナース 「あぐっ、ひぐっ……いま、乳首に塗られたら……」

マリナ 「れろれろれろれろつ！」

ナース 「んんんんんつっつ！」

闇司祭 「んもうつ♪ 暴れ過ぎよお♪ そんなに暴れなくても、射精はさせてあげるわよ？ ちゃんと、イクうとか出ちやううとか言つてくれれば」

ナース 「ひうっ、ああっ、んおおおつ、ほおおおんつ！」

闇司祭 「意地でも言わない気でいるのね。いいわ、だつたら毒液を追加するだけだから♪」

ナース 「や、やめ……んんんつ！」

闇司祭 「言うのが遅いから、もう突っ込んじゃつたわ♪ それ、注入♪」

ナース 「んおおおおおおつ……！」

闇司祭 「注入してゐる間も、同じようにしげ」いてあげるわね♪ ギュチュギュチュ、ニュルニユル、ギュチュギュギュチュ、ニュルニユル……カリのくびれに指を這わせながらあ……ギュチュギュチュ、ニュルニュル♪」

ナース 「んおおつ、ほおおお……ほおう、んおおんつ！」

マリナ 「淡々と私をいじめてたときは大違ひね……れろろろつ、んれろつ、れるつ、れれろつ」

ナース 「ひぐつ、んおおおつ、ほおお、おおおおんつ！」

闇司祭 「ギュチュギュチュ、ニュルニュル、ギュチュギュチュ、ニュルニュル♪」

ナース 「ひあああつ、んいいつ、んおおつ、おおおおおおおつ……！」

マリナ 「れるるるるるるつ、んれるれるつ、れう、れるつ、んちゅつ、れるるるるるつ！」

ナース 「ひいひいひつ……おおおおおつ、おおんつ、んおおつ、おおおおおつ！」

闇司祭 「どこでも感じるようになつていそうね♪ あ、一応これは抜いてあげる♪」

ナース 「くひつっつ！ ひい、ひい、ひい、ひいいいいんつ！」

闇司祭 「あら、イッちゃったかしら？ 精液は出でないけれど……寸でのところで抑えたのね。出してくれちゃったほうがよかつたんだけれど……いいわ、もう一回注入しましよう」

ナース 「ひつ……！ らめえ、れすう……司祭、しゃまあ……もうつ、おちんぽ……ほお、ほお……らめえ……つ！」

闇司祭 「そう言われたら、注入しないわけにいかないわ♪ はい注入っ♪」

ナース 「おおおおおおおおおんっ！ おおつ、おおおつ、おおおおおんっ！」

マリナ 「これだけ喘いで、まだ出したいとは言わないのね」

闇司祭 「すぐに言うようになるわ。チンポは破裂しそうなほど膨らんでるし、我慢汁も止まらない状態だもの。精液が滲み出る副作用は確認できていけれど、本心ではすぐに射精したいって思つてるはずよ」

ナース 「ひくっ、くふあっ、あああっ……それは、言わない、れすう……絶対、にい……言わ、ない……あなたの、一方、的な、責めには、屈し、ない……あふ、あふう、あふう……っ」

闇司祭 「気概はいいけれど、身体はどうかしらね。注入器を抜いて、最後の仕上げに移る

わよ」

ナース「んおおつ……！　さい、（…）…」

闇司祭「やつと終わるとか思つたら大間違いよ。ここからが、一番快感があるんだから♪  
まずは、チンポを咥えて……ああむつ、じゅぶりゅつ、じゅるるつ、んじゅるつ……先つ  
ぽをフェラしながら、竿を手で……んじゅるつ、れるじゅつ、じゅつ！」

ナース「らめえつ……！　おちんぽ、亀頭も竿も感じしゅぎてえ……ほお、ほお、ほお：  
…イクつ、らめえ……おちんぽイクうつ……おちんぽイクつ、おちんぽイクつ、おちんぽ  
イクつ、おちんぽイクつ……！」

闇司祭「ほら……じゅぶりゅつ、じゅりゅじゅりゅじゅりゅつ……！　毒液をたっぷり注  
がれたチンポに、手コキフェラは刺激が強過ぎるでしょ……じゅる、んじゅるつ……シコ  
シコ、シコシコ……むじゅるつ、じゅろじゅろつ……！」

ナース「らめえ……らめえ……おちんぽ取れちやうう……溶けてなくなつちやうう……司  
祭、しやまのお、お口でえ……んおつ、おおつ、おおおおつ、おおおおんつ！」

マリナ「す（）いよがりようね。私でも、（…）まではよがらなかつたかも」

闇司祭「似たようなものだわ」

女医 「ちょっと、何事！」

ナース 「あ……しえんしええ……私、おちんぽイキそうでえ……」

女医 「どういうことよ！ どうして、司祭と被検体がその子を責めてるわけ？」

闇司祭 「いまいいところだから、邪魔しないの……んじゅつ、じゅるるつ、れるじゅつ、ぢゅろぢゅろぢゅろぢゅろつ！」

マリナ 「悪いけど、邪魔させないわ。このナースだって、射精できなかつたらつらいだけよ」

女医 「くつ……！ やりやがつたわね、このド腐れ司祭！」

ナース 「しえんしええ……怒鳴るのもいいれすけど……私をイカせてくだひやいい……もう、おちんぽ限界なんれうすう……」

闇司祭 「というわけだから、この子をイカせるまで待ちなさい……じゅ。ぶじゅ。ぶじゅ。ぶじゅ。ぶつ！」

ナース 「んおおおつ！ イクうつ……精液出るつ……おちんぽ気持ちよくて、精液でるう……つ！ お、んおつ、おおおつ、おおおおおおつ！ イクつ、イクつ、イクうつ、おちんぽイクうううううううううつ！」

闇司祭 「んぶつ……！ んぶつ、んぶつぶつ！ んぶつ！ すつごい勢い……喉奥にビュ  
クビュク当たつて……」

ナース 「おつ、お、おおつ、んおおつ……射精、気持ちいい……射精、射精……びゅる  
びゅる気持ちいいれすうう……つ！」

闇司祭 「全部出しなさい……じゅるるつ、じゅるつ……んく、んくつ……私が飲んであげ  
るから……じゅるるるるつ、んく、んく……んく、んく、んく……」

マリナ 「すつゞ……こんなに飲んでるのに、口から零れてきてる」

闇司祭 「量が多過ぎるのよ……じゅるつ、れえろつ……んく、んく……じゅるうつ、んく  
……じゅるるるつ、んく……」

ナース 「はあ、はあ、はあ、はあ……精液、飲まれるのも気持ちいい……いっぱい飲ん  
でくだひやい、司祭しやまあ……」

闇司祭 「言われなくとも、飲んでるわよ……んく、んく、んく……」

女医 「くつ……指を咥えて見てるだけなんて……」

闇司祭 「いいじやない……んく、んく……かわいい部下の射精シーンよ……ぢるるるつ、

…せつかくだもの、目に焼き付けておいたらいいわ……んぐ、んぐ、んぐ……」

ナース 「はあ、はあ、はあ……射精、終わっちゃいましたあ……」

闇司祭 「ぶああああつ……！ はあ、はあ……十分出したから大丈夫よ」

ナース 「そう、れすかあ……はあはあはあ……」

女医 「もういいわよね。どうしてこんなことになったのか、教えてちょうだい」

闇司祭 「まだよ。本当の仕上げに、毒液の注入があるから」

ナース 「……また、注入う……？」

女医 「やめなさい……！」

闇司祭 「遅いわ！」

ナース 「んおおおおおおおおおおおお！ 入つて、くりゅう……！ ドクドクう、ドクドクう  
……気持ちいいおくしゅりい……いっぱい……ひい、ひい、ひい、ひい……あああ  
あああつ！」

女医 「くつ……完全に壊れてるじゃないの！」

ナース「こわれて、ないれすう……気持ち、いいられえ……んんんっ！ な、なんか出  
そう……また射精……でも、違う……これ、精液じやない……オシツコでもなくて……  
はあはあはあはあ……っ！」

闇司祭「注入器を抜くわ。我慢しないで出しなさい。ぶしゃーって、噴水みたいに出して  
もいいわよ。それっ♪」

闇司祭「潮吹きだわ♪ 言つた通り、噴水みたいに撒き散らしてる♪ 」今まで感じられくなっていたのね。こういうのを見ると、責め尽くした甲斐があつたって思えるわ」

マリナ 「初めて見るかも……こんなになるのね、潮吹きつて」

闇司祭「じつくり見ておきなさい。私でも、そうそう見られるものじゃないわ。ここまで見事に吹き出しているのは、私も初めてなくらいよ。こんなに貴重な人材が、近くにいたなんてね」

女医 「他人事だと思つて……！」

闇司祭 「実際、他人事じやない」

女医 「わたしにとつては、大切な部下で欠かせない存在よ。あなたとは、この子に対する感情が違うの」

ナース 「はあ、はあ、はあ、ああああ……んああああ……出たあ……気持ち、いいのぉ……ほお、ほお……ほお……しえんしえもお、見てくださいましたか……私の、初めての、潮吹きい……おちんぽからあ、透明のおつゆがあ、ふしやーつて……」

女医 「見たわよ。でも、嬉しいことじやないわ」

ナース 「どう、して……？ 私、こんなにえつちになつたのにい……しえんしええは、こ……ういうナースはキライなんれすかあ……はあ、はあ、はあ、はあ……」

女医 「好きとかキレイとかの話じやないわよ」

ナース 「そう、れすかあ……はあ、はあ、はあ……あう」

女医 「なつ……！ し、しつかりしなさい！ こんなんで、失神してはダメよ！」

闇司祭 「しばらくは、声をかけてもムダよ。沈黙状態に入つたから」

マリナ 「沈黙……？」

闇司祭 「いまの私のように、暴走する一步手前の状態ね♪ 眠っていたときのあなたも、沈黙状態だったわ」

女医 「どこまで腐ってるのかしらね、あなたは」

闇司祭 「腐つてなんてないわよ。自分の正義を貫いているだけだもの。うふふつ♪」

マリナ（このお薬、ヤバいどころじゃないわね。二度と投与されないようにして、ここを抜け出さないと。あと、この司祭を敵に回しちゃダメ。できるだけ言うことを聞いて、媚びてるって思われないように演技をして、無事に過ごす必要があるわ）